

## B's・行善寺の設計理念・手法とその評価

### －「ごちゃまぜ」理念に基づいた地域コミュニティ再生－

Design philosophy and method for B's Gyozenji and its evaluation.

- Regeneration of regional community based on the "Gochamaze" philosophy -

○土用下淳也\*1, 西川英治\*2, 山本純平\*3

DOYOSHITA Junya, NISHIKAWA Eiji, YAMAZAKI Juichi, YAMAMOTO Jumpei

"Gochamaze" philosophy is the scheme that all people can have a role and can play an active part by gathering various facilities and people. B's Gyozenji is the initiatives to regenerate local communities based on this philosophy. In this paper, by presenting the design intention and process of completion of B's Gyozenji, we objectively showed the design method and philosophy for realizing the "Gochamaze" regional revitalization.

キーワード：ごちゃまぜ理念, タウン型日本版 CCRC, 住民自治, 地域コミュニティ再生

Keywords: "Gochamaze" philosophy, Japanese CCRC in town, Resident self governance, Regeneration of regional community

## 1. はじめに

### 1-1. 「ごちゃまぜ」について

事業主である社会福祉法人佛子園は、「ごちゃまぜ」という理念に基づいて、様々な事業を行っている。佛子園は、「社会的排除 (Social Exclusion)」の対義語として「ごちゃまぜ (Social Inclusion)」という表現を用いている。我々は設計においては「生きとし生ける物すべての人々が混ざり合うことで相互に関わり合いを持つ関係性を創り出し、お互いに刺激し合うことで今まで体験し得なかったような共感性を呼び起こし前向きに生きようとする心の様態を醸成することを目指している」のが、佛子園の言う「ごちゃまぜ」に繋がると考えてプロジェクトを進めてきた。

### 1-2. 本論の目的

我々は佛子園とともに、いくつかの「生涯活躍のまち (日本版 CCRC)」構想<sup>2)</sup>に基づいたまちづくりを行ってきた。そのなかでも石川県白山市 (旧松任市) 北安田町に計画した「B's・行善寺」は、佛子園の法人本部の建

て替わりに伴うまちづくりプロジェクトである。本論では、B's・行善寺の設計意図と完成に至るまでの過程を提示することで、佛子園による「ごちゃまぜ」のまちづくりを設計者として建築的にどう実現したのかを示すことを目的とする。また、結章では完成後の社会的評価について述べる。

### 1-3. 本論の意義

前述の「生涯活躍のまち (日本版 CCRC)」構想<sup>2)</sup>とは内閣官房まち・ひと・しごと創生本部が定めた地方創生事業の一つであるが、まだまだ完成事例が少なく、まちづくりの成果を報告する資料や設計者の事例報告が乏しいのが現状である。日本版 CCRC の事例調査の報告としては山田あすか氏<sup>3)</sup>や高尾真紀子氏<sup>4)</sup>による「ゆいま〜る」の報告があるが、ヒアリングの報告や高齢者の住まいとしての分析にとどまっている。一方で高尾氏は、高齢者だけのコミュニティの是非を日本版 CCRC の課題として挙げている。本計画は「ごちゃまぜ」のまちづくりを理念としているため、本論は日本版 CCRC だけにとらわれな

\*1 株式会社 五井建築研究所、取締役

\*2 株式会社 五井建築研究所、代表取締役

\*3 株式会社 五井建築研究所

Director, GOI architecture & associates

CEO, GOI architecture & associates

GOI architecture & associates

い理想的なまちづくりの事例報告として、更に設計者自身による報告として意義があると考えます。

#### 1-4. 本計画の背景

##### 1-4-1. 計画敷地について

計画地は石川県白山市（旧松任市）北安田町に位置する、田園と住宅が混在する場所で、1418年（応永25年）開基の日蓮宗寺院行善寺に隣接している。当時の住職（社会福祉法人佛子園初代理事長）が戦災孤児を庫裏に引き取ったことが始まりとなり、1960年（昭和35年）に社会福祉法人として開設した場所である。<sup>5)</sup>

本敷地は日蓮宗寺院行善寺の隣であり、1966年（昭和41年）から佛子園の園舎が建つ。1979年（昭和54年）には佛子園の施設を利用して「石川県立明和養護学校松任分校」を開校したものの、2010年（平成22年）に同校が閉校となった。これを機に佛子園の本部として建て替える計画が始まった。

そのため、発祥の地である日蓮宗寺院行善寺を地域の「へそ」として、これを取り囲むように計画を行った。

##### 1-4-2. 周辺の状況について

白山市の人口は2001年（平成13年）112,939人に対して、2011年（平成23年）11,0348人と、10年間ほぼ横ばいである。一方北安田町の人口は2001年（平成13年）1,011人に対して2011年（平成23年）1,522人と、10年間に511人増加している。<sup>6)</sup> 北安田町は継続的に宅地開発が行われ、年々田畑が市街化している。このよう

に本敷地は、「田園地域型」といえるが、近年宅地化が進んでいる地域である。

##### 1-4-3. 地域住民との関係について

雄谷良成氏監修の『ソーシャルイノベーション』<sup>7)</sup>より引用すると、1980年（昭和55年）から、周辺住民とのしこりが残るトラブルが何度かあったという。更に、知的障害のある子がひとの家に勝手に上がり込んできてご飯を食べていったなどの迷惑行為がよく起こり、地域との交流がほとんどなかったために佛子園は時に眉をひそめる対象だったと述べている。

そして「町内役員会や地区役員などに雄谷理事長や佛子園スタッフが直接説明に赴き、過去のしこりを解きほぐしながらコミュニケーションを深めた。（中略）地域の要望の声に耳を傾けながら、法人本部のリニューアル計画は積み上げられていった。」<sup>7)</sup>

このように法人本部の設計にあたって施主の要望は、地域ニーズを取り込むことで地域と良い関係を築くことに重点が置かれていたといえる。

## 2. 計画について

本計画には施主である社会福祉法人佛子園の意図が色濃く反映されている。そのため以下の論では、設計にあたって各要素がどのように決定したのかをできる限り明確にするために、次の4つの指標に基づいて整理する。

### ① 施主の要求を取り入れたもの

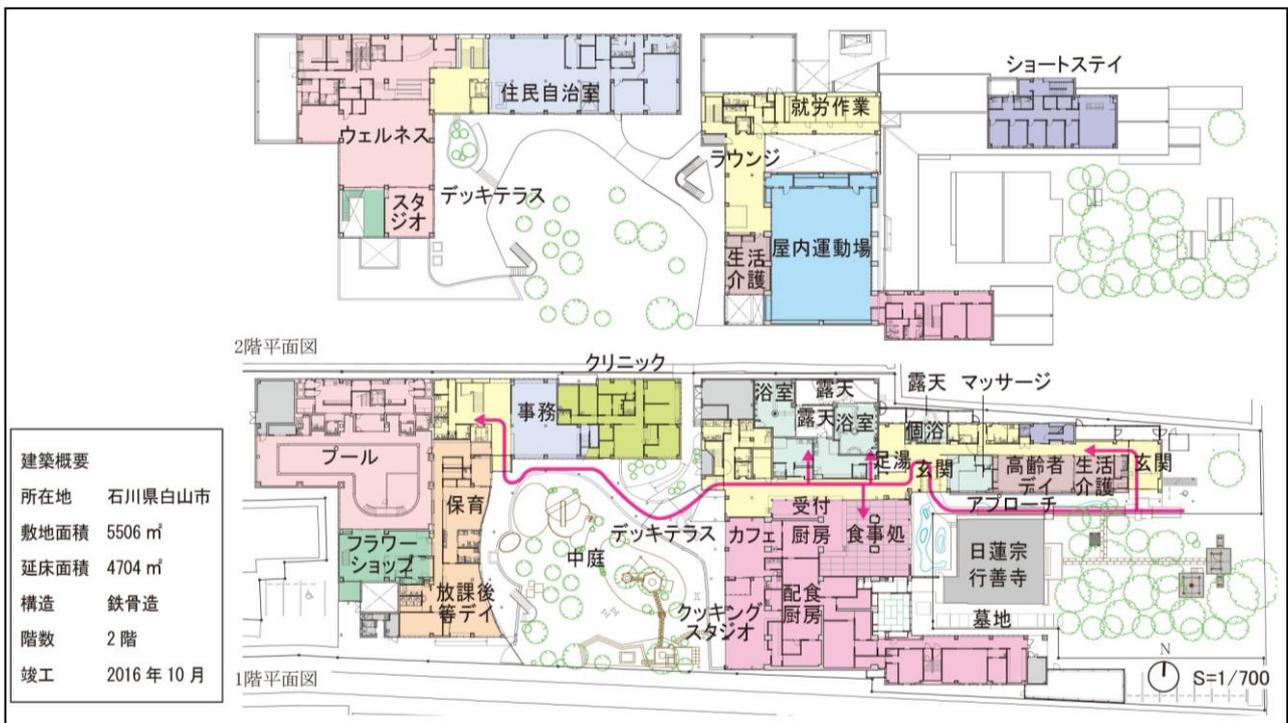


図 2 全体平面図

- ② 施主の要求を設計者が空間に翻訳したもの
- ③ 設計者の提案を、施主の了解の上で実現したもの
- ④ 施主の要求と設計者の提案で意見が分かち議論となったもの

以下文中に(①)～(④)を記載し、終章でまとめる。

## 2-1. 全体計画について

この施設を計画するに当たり佛子園から求められた機能は多岐にわたる。まず福祉施設として高齢者デイサービス、障がい者生活介護、ショートステイ、小規模保育、放課後等デイサービスがあり、医療施設として内科クリニックの設置が求められた（内科クリニックは竣工後2018年（平成30年）10月に改修し、整形外科に変更となっている）。さらに地域交流施設として公衆浴場、食事処、ウェルネス（健康増進施設）、温水プール、フラワーショップ、カフェ、クッキングスタジオ等の設置が求められた。

平面計画ではこれらの多様な機能が絡み合うように配置し、あえて動線が交わるようにすることで利用者同士の交流が生まれることを促している。各機能の間仕切りには透明ガラスを多用し、視覚的な連続性を持たせる(②)ことで施設内の様々なアクティビティを感じられるよう配慮した。

西側は子供たちの遊び場であり大人たちの憩いの場である中庭を中心に配置し、その周囲に保育園やウェルネスなどを配置(②)することで活動的なエリアとして計画している。

また、外部に対しても開放的な構えをとり、敷地内へのアクセスや建物のエントランスは複数設けることで、誰もが自由に入出ることができる。(②)

### 2-1-1. 温泉と食事処

日本人の温泉好きはだれもが認めるところであるが、佛子園は周辺地域140世帯の入浴料を無料とする仕組みをつくり、多くの地域住民が日常的に通い賑わいを生み出す仕掛けとしている。

大浴場の浴室の内装はこの地域になじみの深い日本海をイメージした「海の湯」と石川県を代表する山である白山をイメージした「山の湯」の2種類を用意している。これは男女が日替わりでそれぞれの内装を楽しむことができるよという要望を踏まえたものである。「海の湯」はモザイクタイルを全面に使用し、銭湯絵土の中島盛夫氏を招いて日本海を描いた壁画を設置した。「山の湯」は杉板と炭入りモルタルを内装に使用し、杉板には眞壁陸二氏による白山をイメージした壁画を施した。(②)

また、貸し切りで使用できる「個浴」も備えている。これは家族風呂としての利用だけでなく、介護が必要な高齢者デイサービスの利用者の入浴も想定したものである。一般的な福祉施設では機械浴を設けることが多いが、佛子園の場合は機械に頼らずあくまでも人の手によって介護を行う方針をとっているため、脱衣場や浴室内に手摺を設置する等の配慮に留めている。(①)

更に無料で入浴できる足湯の設置も求められた。これは利用者同士のコミュニケーションを促すためのツールとなるようメインエントランスから食事処・大浴場に至る動線上に配置した。(①)更に足湯に隣接して休憩処を設置した(①)が、ここでは高齢者デイサービスの利用者と近隣の子供たちが将棋などを楽しむ姿が日常的に見られる。

食事処では蕎麦をメインとした食事が提供される。内装は木を多用し、格天井やレトロな照明器具を用いた和のデザインとしている。(②)床は利用者がゆっくりと時間を過ごせるよう畳敷きとしている。また、隣接する寺院との間の庭園の景色を楽しみながら食事ができるよう木製建具の大開口を設けている。

この食事処と温泉を向かい合わせに設置する(④)ことで、入浴後に食事処で休憩や食事をし、ゆっくりと時間を過ごす中で様々な出会いや交流が生まれるように配慮しており、食事処と温泉の組み合わせはこの施設の中におけるコミュニティの中心的な場所として位置付けている。

### 2-1-2. 動線計画と廊下



図3 食事処（2015年撮影）（左手にカウンター、中央にソファ席を見る。体育館下の天井懐を利用して格天井としている）

食事処と大浴場の間を通る廊下も交流を促す重要な空間と位置付けている。この廊下は食事処や大浴場だけでなく、高齢者デイサービス、障がい者生活介護、足湯やヒーリング、カラオケなどといった室を接続させ、様々な人の動線があえて交わるように計画(④)しており、絶えず人が行き交う賑やかな場所となっている。ここには

地域の人々が生産した農産物や駄菓子などを販売する機能も持たせている。

食事処のカウンターはこの廊下に接するように配置しており、カウンター内のスタッフが施設全体の窓口となり、住民たちとのコミュニケーションを図る重要な場所となっている。



図 4 廊下 (2015 年撮影) (左手に食事処入口、とカウンター。右手は温泉入口と、駄菓子や食器の販売棚が並ぶ。壁に掛かる入湯札を返せば地域住民は無料で入浴できる)

### 2-1-3. アプローチと生活介護、高齢者デイサービス

本体建物と日蓮宗寺院行善寺の間を抜けるようにメインのアプローチを計画した。アプローチの脇には井戸水を利用した小川を設け、来訪者がこの小川のせせらぎの音を聞き、寺院からの線香の香りの中を通り抜けるように建物へと入る計画とした。(2)これは、施主が日蓮宗行善寺の住職でもあることから、寺のように五感で感じる場所がほしいという要望を踏まえたものである。

また、障がい者の生活介護と高齢者デイサービスをこのアプローチに面して設置している。(4)これらの部屋には全面開放できる大開口と欄干を設置しており、来訪者は部屋で行われる活動を見ながら建物に入る計画としている。この部分の平面は設計初期では図5のようであったが、活動を見せることによって、生活介護や高齢者デイサービスの利用者と地域住民の交流を促すことを意図して、廊下の位置を変更した。

一般的な福祉施設では掃除のしやすさや建設コスト抑制の観点から塩ビ系の床材などが使用され簡素なつくりになることも多いが、ここでは利用者の快適性を重視して落ち着いた和の設えとしている。(1)

更にこの生活介護と高齢者デイサービスの室は、休日の地域の行事や、夕方以降の宴会など多目的な利用を想定していた。福祉だけの一義的な利用にとどまらず、様々な用途での使用に耐えうるデザインとすることも和の設えを採用した理由である。

### 2-1-4. 中庭



図 5 平面検討図抜粋 (2012-04-24 作成図面を編集)

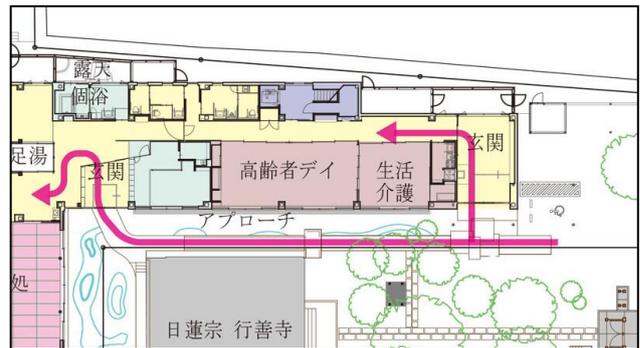


図 6 平面図 (竣工図を編集)



図 7 アプローチ (2015 年撮影) (左手に日蓮宗寺院行善寺、右手に小川と高齢者デイサービスが見える)

施設西側には子供たちの遊び場であり、大人たちの憩いの場となる中庭を設けている。

中庭へはだれでも自由に出入りすることができ、ここには、ペダルカートのコース、イベント時にステージになるトランポリン、安全に配慮しつつも子供たちの冒険心をくすぐるアスレチックなどの遊具を設置した。(1)保育園の子供たちだけでなく地域の子供たちの遊び場にもなっており、賑やかな声が施設に潤いを与えている。中庭の周囲にはデッキテラスを巡らせ、程よいスケールとすることで施設の一体感を高めるよう配慮している。(2)

この中庭を囲うようにして1階には小規模保育や放課後等デイサービス、カフェ、オフィス、キッチンスタジオ2階にはウェルネス、自治室などを配置しており(2)、

賑やかな雰囲気をつくりだし、また子供たちが自然な形で見守られるような環境となるように計画している。



図 8 中庭（2017年撮影）（一部既存樹木を利用して、その中に遊具を計画。その周りにデッキを巡らせている）

### 2-1-5. ウェルネス

地域住民の健康増進のためのウェルネスを設置している。各種の運動器具や温水プールを完備①しており、子どもや高齢者、障がいを持つ人が、地域住民に交じって遠慮なく利用できる環境を整えている。

運動器具を配置したジムスペースとスタジオは2階に配置し、外部の木製建具を開放してデッキテラスと一体的な利用が可能な計画とし、デッキテラスや中庭を介して他の機能とのつながりを持たせている。

温水プールは1階に配置し、透明ガラスの建具を介して保育園、フラワーショップとつながる計画としている。②

他の機能とのつながりを重視して2層に跨った計画としたが、体の不自由な方にも利用しやすいようウェルネス専用のエレベーターを設置している。③

また、内装においてはここでも木材を使用し暖かみのあるデザインとしている。特にプールの天井は全面杉板貼りとしている③が、プールという過酷な室内環境を考慮して下地や塗料の選定を行った。



図 9 プール（2017年撮影）（天井は全面杉板貼り。床は滑りにくいようゴムチップとした。）

### 2-1-6. クリニック

施設利用者や地域住民の健康をトータルにサポートするため整形外科クリニックを設置している。デイサービス利用者の健康状態の確認や、ウェルネスの器具を使用したリハビリを行うなど各施設と連携して健康管理の面で施設全体の重要な役割を担っている。

クリニックは各所からの利用者がアクセスしやすいよう施設全体のほぼ中央、中庭に面した位置に配置したが、クリニックという機能の特性上他の機能に比べて開口の大きさを抑えややクローズな設えとしている。③

### 2-1-7. 住民自治室

地域住民たちが自由に集え話し合いができる住民自治室と呼ばれる部屋を設置している。この地区は平成以降宅地開発が進んだ人口急増地域であり、旧住民と新住民がコミュニケーションを築く場や機会がほとんどなかった。そのため、地域のニーズとして地域の人たちが気軽に集まり、会合などを持てる場が必要であった。<sup>5)</sup> 更にこの場所を施設職員のフリーアドレスオフィスとしても利用することで、住民と職員が気軽にかかわることができる場が求められた。

そこで住民自治室内では、建具によって仕切られた場所を作らない計画として、誰でも利用できることが分かりやすい構成とした。③プリンタコーナーにも建具は設けず、地域住民でも利用できる計画としている。一方で、作り付けの棚は全て施錠できる計画①とすることで、スタッフの個人のもので管理しやすい計画とした。

また、福祉施設としての利用者情報は一人ずつファイリングして管理しており、厳重に管理できる書庫が求められた。これはプリンタコーナーのさらに奥に計画③することで、入り口が人目につきにくい計画としている。

更にここには、誰でもセルフサービスでコーヒーを飲むことができるカフェカウンターが求められた。住民や

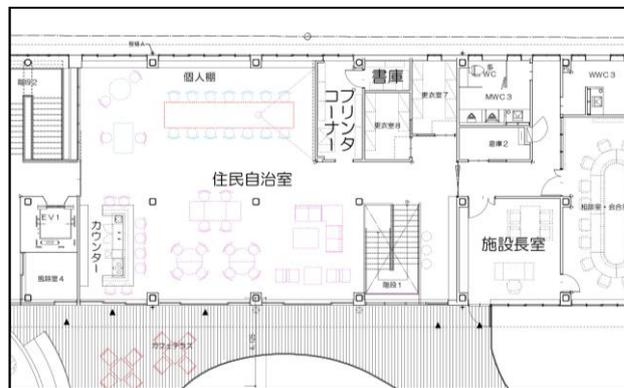


図 10 住民自治室まわり平面図  
（書庫はプリンタコーナーのさらに奥に配置）

職員が自分のカップを置いていつでも利用できることで、この場所に愛着を持てる場所にしたいという思いである。これは事務所の給湯室を兼ねた計画(②)とし、隣接する理事長室や会議室への給湯も全てこのカフェカウンターで行うこととした。そのため事務所の給湯室でもあるが、カフェの雰囲気を意識して計画している。



図 11 住民自治室 (2017 年撮影)  
(奥にカフェカウンターを見る)

またこのカウンターにはビールサーバーも備えており、イベント時にはビール等のアルコールを提供するドリンクカウンターとしても機能(①)する。

#### 2-1-8. 小規模保育、放課後等デイサービス

健常児 0~2 歳児の小規模保育 (定員各年齢 4 名、計 12 名)、障がい児の放課後等デイサービス (定員 32 名) を中庭に面して配置している。これらの部屋の中庭に面した開口は R を描く全面開放可能な木製建具(③)とすることで中庭との一体的な利用を可能にしており、子供たちが中庭で元気に遊ぶ姿が日常的に見られる。部屋の配置や建具の開放性によって中庭の利用を促し、子供たちの姿を他の利用者にも見せることで施設全体に活力を与えることも意図している。



図 12 放課後等デイ (2017 年撮影)  
(R を描く全面開放可能な木製建具)

#### 2-1-9. カフェ、キッチンスタジオ

小規模保育、放課後等デイサービスといった子供の施設と中庭を挟んで向かい合う形でカフェとキッチンスタジオを配置(②)している。

このカフェは「883 (パパさん) カフェ」と名付けている。その名の由来は中庭で遊ぶ子供たちを見守りながら父親たちが集う場所という意味と、店内に展示された 883 cc のハーレーのバイクから来ている。内装はラフでハードなイメージになっており、自家製のハンバーガーなどを提供する。

父親のための 883 カフェに隣接して主婦向けのキッチンスタジオがある。これらは中庭で遊ぶ子供を見守りながら、親たちが安心して自分たちの時間を過ごすためのものである。

#### 2-1-10. フラワーショップ

施設の西端にはフラワーショップを配置している。このフラワーショップは 2 層吹き抜けになっており、1 階では温水プール、保育園、2 階はウェルネスと透明ガラスの建具を介して繋げている。(②)特に温水プールとは自由に行き来することができる計画としているが、これはプール利用者の休憩のためのドリンクを提供する機能をフラワーショップに持たせたいという施主の要望に応えたものである。また、緑に囲まれたプールにしたいという要望も踏まえている。

敷地内には植物を育てるための温室も設置している。フラワーショップでは様々な植物を販売すると同時に、スタッフが施設全体の植栽の管理も行っている。

#### 2-1-11. 配食サービス

周辺地域の独居の高齢者などのへの配食サービスも行っている。2019 年 (令和 1 年) 現在、1 日約 150 食 (昼夜各 75 食) を提供している。

配食サービスは単に食事を提供するという目的だけではなく、高齢者の自宅に訪れて話し相手になる、日常生活に問題がないか見守るといった目的も持っている。

配食サービスの厨房は食事処やカフェの厨房と裏動線でつながっており、スタッフの流動的な配置を可能にしている。

#### 2-1-12. 上下足について

この建物は、温泉・食事処側は館内すべて上足としている。一方で中庭に面したカフェ、事務室、住民自治室は基本的に下足で、ウェルネスや放課後等デイなどそれぞれの場所で靴を脱ぐ形式としている。そのため、例えば東側玄関から西側の中庭に至るには、一度靴を脱ぎ、靴を持って西側まで移動しなくてはならず、完成後は廊下を往復する人をしばしば見かける。

これは、温泉から上がってそのまま食事処で一服するなどを想定して、東側全体を裸足で過ごせる環境とする

一方、西側は中庭やデッキとできる限り連続して利用できるように、また、地域住民など一般の利用者が気軽に入りやすくする為に下足とするというように、それぞれの機能ごとに上足と下足を検討した結果である。

設計当初は廊下を土間として下足主体とすることで、上下足の切り替えの問題を解消する計画としていたものの、最終的には利便性よりも機能の特性に合わせて個々に決定した。これは、靴を持って往復する人が廊下の通行量を増やし、建物のにぎやかさに寄与すると考えた施主の了解を経て決めたものである。

## 2-2. 就労支援について

この施設の大きな特徴の一つとして、施設全体が障がい者の就労支援の場となっていることが挙げられる。

就労支援A型が定員40名、就労支援B型が定員30名である。ここでは多様な施設の中から自分に合った働く場を見つけることができ、職員だけでなく地域住民や利用者からも自然に見守られる環境で働くことができる。障がいを持つ人も高齢者も就労を通して地域に参画し、生きがいを持って生活することを目指している。

## 2-3. 内外装デザイン

外装は、東側は越前古代瓦を使用するなど落ち着いた和の設えとして日蓮宗寺院行善寺と調和させた意匠とした。よりアクティブな機能を配置した西側は現代的な素材を使用したシンプルなデザインとしている。

内装についても、それぞれの機能ごとに場に応じたデザインとしている。東側に位置する食事処や高齢者デイサービスなどは施主の要望もあり大正ロマンを意識した。

照明や外部からの光も抑えて、落ち着いた雰囲気を作り出している。一方西側のウェルネスや住民自治室はより明るい雰囲気の現代的な内装としており、開口部が多く開放的な空間としている。サイン計画においてもそれぞれの機能に合わせたデザインを用いている。

それぞれの場にあったデザインを採用し、あえて切り替えられたデザインは多様な機能が集う「ごちゃまぜ」の建築を象徴しており、様々な建物が集まる街のような雰囲気を一つの建築の中で展開している。

## 2-4. 各部分の寸法について

施設全体の方針としてはヒューマンスケールに則した寸法となるように設計し、施設規模を感じさせない親しみやすい空間となるよう配慮している。また、これまで述べてきたようにこの施設には多様な機能が混在するが、それぞれの機能や使い方、利用者の特性に合わせて各部の寸法を設計している。

廊下を例に挙げると、最も多くの人が行き交い、雑貨や駄菓子の販売も行う食事処と温泉の間の廊下幅は3000mmとしている。これは、廊下に什器を置き、更に人がすれ違うのに最適な寸法である。

それに対して小規模保育、放課後等デイサービスといった子供が多く利用する廊下は法律上の最小値である1200mmと狭くしている。さらに、この廊下の腰壁は床面から700mmと低くすることで子供の視線が通るよう配慮している。(③)また、会話を生む仕掛けとして食事処のカウンター内の厨房の床レベルを客席床レベルより300mm下げている。(②)これによって椅子に座った状態の利用者とカウンター内のスタッフの視線が同じレベルとなり、会話しやすい状態をつくっている。

この施設では車椅子利用者も多く、また障がいを持った方でも働きやすいよう、利用者動線だけでなくスタッフのバックヤード動線においても開口部は800mm以上確保する(③)など、施設全体において使用に支障がないよう配慮している。

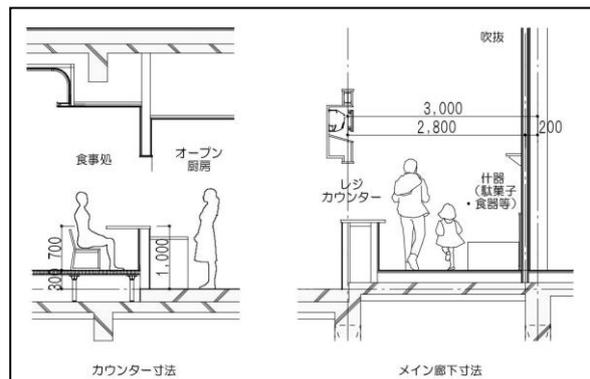


図13 各部寸法（断面詳細図を抜粋の上編集）

## 2-5. あるものを活かす

計画敷地には運営法人の旧本部の建物と旧養護学校の校舎（1979年（昭和54年）開校、2013年（平成25年）移転）が建っていた。その中で旧養護学校の体育館棟は解体せずに改修し、それに本体施設を増築する形をとっている。体育館2階は内装と空調のみの改修とした。改修後は体育館としてだけでなく、就労支援の作業、ヨガ教室、講演会など多目的に利用されている。1階はコンクリートの躯体を利用し、建設費の削減を図っている。

また、計画敷地東側の日蓮宗寺院行善寺は佛子園の発祥の地であり、精神的にも環境的にも施設全体の心柱的存在と捉えている。寺院の改修は本体施設の工事と並行して進めた。極力既存の状態を保持しながら、鉄筋コンクリートの基礎の増設（既存は石場建て）や筋交いの設置等を施し耐震性を高めている。また、境内の緑は既存

のものをそのまま残しており、新たに設えた流水とともに風情あるアプローチを形成している。

この寺院はもともと安産祈願で周辺地域において有名であり、そういった記憶や歴史性もこの場所に安心感や親しみやすさを与えている大きな要因と考えている。

## 2-6. 景観への配慮

施設東側は日蓮宗寺院行善寺に合わせた和の設えとし、寺院境内の既存の緑を活かした落ち着いた景観をつくっている。またこの部分の建物高さは、軒高7.2m、最高高さ9.2mに抑え、低層住宅地の中にあっても違和感のないスケールとしている。アクティブな機能が集まる施設西側の中庭は南側の交通量の多い道路に対して開いた形状としている。施設の活動を街に対して見せることで、周辺地域に賑わいのある風景を生み出すことを目指した。



図14 B's・行善寺南面鳥瞰 (2015年撮影)

## 2-7. 運営上の特徴

この施設の運営上の大きな特徴として、高齢者サービスや障がい者生活介護といった福祉施設から食事処やウェルネスまでの多様な施設がすべて社会福祉法人佛子園によって運営されていることが挙げられる。

従業員は正職員が56名、パートまで含めると総勢190名になる。これらの従業員はそれぞれ所属する部署における業務を主な業務としているが、人手が不足する際は他の施設のサポートにまわるなど、流動的に人員を配置することが可能となっている。

「複数の機能が共存しながら一つの法人によって運営している」ことは施設の利用においても大きなメリットを生んでいる。日中は高齢者サービスとして利用する部屋を夜間は食事処の宴会や職員の会議に使用するなど、各室の稼働率を高めることができるため、常に賑わいのある状態をつくることができる。ウェルネスの利用者が運動した後に天然温泉でリラックスすることができる、保育園の子どもたちがウェルネスのプールを利用できる、デイサービス終了後も食事処で団らんできるといったように、多様な機能を複合的に組み合わせることで、利用者にとっても経営上も大きな相乗効果を生んでいる。

また、このように多様な機能を展開していても運営法人の「ごちゃまぜ」の理念は全ての従業員に徹底されており、高齢者や障がい者へのサポート等、利用者はこの施設のどこにいても気持ちよく過ごすことができる。

## 3. 計画のまとめ

### 3-1. 設計プロセスについて

設計にあたっての決定要因をまとめると表1のようになる。①、②から分かるように、多くは施主の要望によって実現しているものの、要望は「ビールサーバーの設置」といった具体的なものから、「五感で感じる場所」など抽象的なものまで多様である。これらの要望を整理しつつ、楽しい雰囲気づくりのための内装材の選定や腰壁高さの検討など設計者としてできる限りの提案を行ってきた。(③)更に④に挙げるように、打ち合わせの中で、食事処と温泉の配置計画や廊下の位置づけなど、建物の中でも重要な場所のイメージを施主と設計者の間で議論しながら決定したことが分かる。

### 3-2. 設計手法について

以上の設計プロセスを踏まえて整理すると、重要な点として以下の二点が挙げられる。

①それぞれの場所の利用の仕方を具体的に想定することによってできる限り一義的な利用にならないように計画する。

「生活介護・高齢者デイサービスの部屋を、休日の地域のイベントや夕方の宴会の利用する」ことをはじめ、「住民自治室とスタッフのフリーアドレスオフィスを兼ねる」、「中庭のトランポリンが屋外イベントのステージになる」、「フラワーショップがプール利用者の給水コーナーになる」など、実際に全てが想定通り利用されるかどうかに関わらず、多様な空間が生まれている。何にでも使える特徴のない空間を作るのではなく、一つの用途のために計画したものを、他の用途でも使えるように考慮することで、多様な人が利用できる場所になり、いろいろな人がいることが居心地の良さに繋がっている。

②わかりやすさや利便性よりも、想定される利用者がより自然にふるまえることを優先して計画する。

設計者であれば当然気になるような点でも、打合せの過程で、「地域の人なら慣れればわかる」「無駄な行動がにぎやかになっていい」など、利便性にとらわれない理由によって決定した場所が数多くある。これはこの施設が地域の人々の地域のものであることを、首尾

表1 設計にあたっての決定要因 (①施主を取り入れたもの ②施主の要求を設計者が空間に翻訳したもの ③設計者の提案を、施主の了解の上で実現したもの ④施主の要求と設計者の提案で意見が分かれ議論となったもの)

項目	意図 (②は施主の要望, ④は変遷)	
①	無料で入浴できる足湯	家族風呂だけでなく、介護サービスの入浴も想定
	貸し切りで使用できる個室	
	足湯に隣接して休憩処を設置	
	生活介護、高齢者デイサービスを和の設えとする	利用者の快適性を重視
	自由に出入りできる中庭に遊具を設置	
②	作り付けの欄は全て施錠できる計画 (住民自治室)	利用者のいたずら等防止、個人欄の設置
	カウンターにビールサーバーを設置 (住民自治室)	イベント時にはビール等のアルコールを提供
	間仕切りに透明ガラスを多用し、視覚的に連続性を持たせる	施設内の様々なアクティビティを感じられる
	中庭と、その周囲に保育園やウェルネスなどを配置	活動的なエリアをつくる
	敷地内へのアクセスや建物のエントランスは複数設ける	自由に出入りできる
	大浴場は海の湯、山の湯の2種類を用意	男女が日替わりでそれぞれの内装を楽しむことができる
	内装は木を多用し、格天井やレトロな照明器具を用いる	和のデザイン
	小川のせせらぎ、線香の香りの中を通り抜けるアプローチ	五感で感じる場所
	中庭を囲うようにして様々な機能の部屋を配置	子供たちが自然な形で見守られるような環境とする
	温水プールを1階に配置し、保育園、フラワージュップとつながる	見守る場所がほしい、緑に囲まれたプールにしたい等の要望
	事務所の給湯室を兼ねカフェカウンター	セルフサービスでコーヒーが飲める
	中庭にカフェとキッチンスタジオを配置	中庭で遊ぶ子供を見守りながら、親が安心して自分たちの時間を過ごす場所
	温水プールと自由に行き来することができるフラワージュップ	緑に囲まれたプール、プール利用者の休憩のためのドリンクを提供する
	厨房の床レベルを客席床レベルより300mm下げる	利用者とカウンター内のスタッフの視線を揃える
	③	中庭の周囲にはデッキテラスを巡らせる
ウェルネス専用のエレベーターを設置		バリアフリーに配慮
全面杉板貼りのプール天井		楽しい雰囲気になりたいという要望から提案
開口の大きさを抑えややくローズな設えのクリニック		
住民自治室内では、建具によって仕切られた場所を作らない		誰でも利用できることが分かりやすい構成
厳重に管理できる書庫をプリンタコーナーのさらに奥に計画		入り口が目につきにくい計画
Rを描く全面開放可能な木製建具 (小規模保育、放課後等デイサービス)		中庭の利用を促し、こどもたちの姿が施設全体に活力を与える
食事処と温泉の間の廊下幅を3000mmとする		廊下に什器を置き、更に人がすれ違うのに最適な寸法
小規模保育、放課後等デイサービスの廊下の腰壁は床面から700mm		子供の視線が通るよう配慮
④		食事処と温泉を向かい合わせに設置する
	廊下は様々な人の動線があえて交わるように計画	当初は通路としての機能を優先していたが、徐々に要素が増えて複合化した。また、通路的要素の中に安らげる「島」をつくりたいという施主の要望によって、にぎやかな場所とゆっくりくつろぐ場所を意図的にゾーニングすることとなった
	生活介護と高齢者デイサービスをアプローチに面して設置	活動を見せることによって、生活介護や高齢者デイサービスの利用者地域住民の交流を促す

一貫して施主と設計者で目標を共有した結果実現している。

そのためには、設計者がまず佛子園の「三草二木」<sup>注1)</sup>という思想に深く共鳴したということが重要であった。それによって我々設計者もまた、佛子園が目指す「ごちゃまぜ」の理念を実現することに大きな意義を感じた。また佛子園の言う「ごちゃまぜ」という理念が、社会的包括や共生などの抽象的な理念よりもわかりやすく、誰もが具体的にイメージしやすいことも功を奏している。そして、佛子園と設計者のやり取りの中で、どうすれば人と人との交流が生まれるかを判断基準としてプロジェクトを進めたことが、自然にふるまえる環境を実現できたポイントだと思う。

TVの取材中に、客が頼んだ蕎麦に就労スタッフがたれをつけ忘れ、客が自ら取りに行く場面がある。<sup>※</sup>彼はそこで「気にならない。(中略)家みたいな感じ」だと言う。それは自然にふるまえる雰囲気や端的に示している。

## 4. 結章

### 4-1. 関係人口 (利用者数) について

佛子園は建物利用者の数を「独自に関係人口」と呼び、交流がどのくらい生まれているのかを把握するための目安として重要視している。当法人では、福祉の利用者に

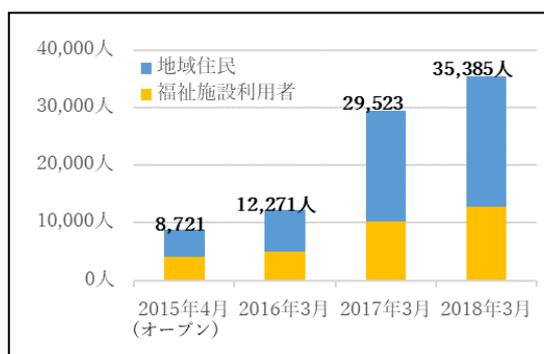


図15 月当たりの施設利用者の延人数の目安 (地域住民は福祉サービス以外の利用者を示す。(佛子園集計結果を基に筆者作成) <sup>注2)</sup>

加えて、温泉、食事処、ウェルネス等の利用者や保育園の送迎など、更に施設内のイベントに参加した人を月ごとに集計している。この記録によると、建物完成後から月あたりの、佛子園の言う関係人口の推移は図15のようになる。1期オープン当初の月当たりの交流人口は8,721人であり、そのうち地域住民 (福祉サービス以外) の利用者は約55%である。現在では月に35,385人もの人に関わり、更にその約65%の人が地域住民 (福祉サービス以外) である。北安田町の人口が2,028人であることを考慮すると、多くの地域住民が繰り返し訪れていることが伺われる。

### 4-2. 建物利用者の雰囲気

『ソーシャルイノベーション』<sup>7)</sup>によると地域住民の意見として、「私も温泉はよく利用していますね。介護予防でスポーツジムに通っているお年寄りもけっこういると聞いています。知的障害者も今はまったく気にならない。(中略)地域に障害者がいることが当たり前というか自然になってきています。」との事であり、福祉施設でありながら、子どもからお年寄りまで多くの世代が日常的に利用していることが感じられる。

### 4-3. 評価

#### 4-3-1. 外部からの評価

本施設は、2018年医療福祉建築賞<sup>9)</sup>、2017年GOOD DESIGN賞ベスト100特別賞[地域づくり]<sup>10)</sup>、平成30年日事連建築賞 優秀賞<sup>11)</sup>などを受賞した。

医療福祉建築賞によると、「規模は大きいですが、建物のボリュームを小さく分割したことで、周囲の住宅地のスケールや隣接する行善寺の庭園や趣も調和している。各施設の仕切りには透明ガラスが多用され、視覚的な連続性があり、様々なアクティビティが共存していることが感じられる。(中略)地域に賑わいや健康をもたらしながら、障がい者が職員だけでなく地域住民や利用者からも自然に見守られる環境を実現している。」という選評を頂いた。

#### 4-3-1. 設計者としての思い

運営者の社会福祉法人佛子園は先に「シェア金沢」を創設していた。2014年3月にオープンし、エリア型日本版CCRCのモデルとなっている。この建設時期と並行してBs行善寺の設計が進められた。私たちにとってシェア金沢の設計時では十分に理解できていなかった佛子園の理念を現場の経験を通してかなりの部分で理解を深めこの設計に臨んだ。シェア金沢の経験を踏まえ施主側のプログラムにも変化が見られた。地域再生を推進するタウン型日本版CCRCの新しい機能としてウェルネスと住民自治室が登場した。また周辺にある既存医療施設や福祉施設との連携を踏まえ、より広域的な拠点施設としての役割を担うこととなった。

この建築のテーマは突き詰めると「出会いの場」創りであった。それも「さりげなく出会う」場である。元々建築は芸術として論じられる場合が多い。しかし私たちが目指したのは人間の感動を生む芸術的な「空間」づくりではなく、ひととひとを結ぶ「コミュニケーション」を自然に育む場づくりである。どうしたら人とひとが違和感を抱くことなく触れ合うことができそれを深めていけるのか？それも障がい者も健常者も、老若男女を問わずという極めて困難なテーマと向き合ってきたようにと

思う。シェア金沢の経験を踏まえ私たちがずっと考えさせられたことは建築には「機能や効率」より重要なことがある。建築の主役は誰か？ということではなかったかと思う。Bs行善寺は決して機能的な建築ではない。人とひとが入り乱れてしまう動線計画である（「動線の複層化」）。また移動するにも下足を持ち歩かなくてはいけないという不便さもある。しかしそういった行為が逆に人とひとを結びつけるという逆説的な計画論でもある。

医療福祉建築賞では「視覚的な連続性があり様々なアクティビティが共存していることが感じられる」との評価頂いているが、その「視覚的な連続性＝空間の透過性」こそ多様性を持つ様々な人びとのさりげない出会いに重要であることが認められたものと思う。これらは後の輪島カブーレに生かされていく。今後も地域再生のプロジェクトは全国で展開されていくと思うが、私たちの経験がそこに少しでも生かされていくことを望んでいる。

#### 参考文献

- 注1) 「三草二木」とは、法華経で説かれる教えであり、仏の慈悲は育ち方の異なる大きささまざまな草木に、降り注ぐ雨のように差別なく平等に注がれていることを指す。(『ソーシャルイノベーション』<sup>7)</sup> 参照)
- 注2) 表15は、社会福祉法人佛子園が集計した資料を基に筆者が作成した。ただし集計方法は、食事処のレジ、ウェルネスの来館者、温泉の受付、保育園の送迎、イベントの参加者など、教えられる利用者のすべての集計であるため、相当数の人が重複している。正確に訪れた人数を報告するものではなく、あくまで施設と関わった人数の目安である。

#### 参考文献

- 1) 小林純, 山崎寿一, 山口秀文, 地域密着型サ高住における居住者特性を地域との関係に関する研究—地方小都市における高齢者居住システムに関する研究—, 日本建築学会住宅系研究報告会論文集13, p81-90(2018)
- 2) 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局, 「生涯活躍のまち」構想に関する手引き(第3版), 2016.4
- 3) 古川亮, 高瀬敦, 山田あすか, 古賀蒼章, 福祉型複合コミュニティの拠点施設における立地特性と空間構成に関する研究 その1, 日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)(2018)
- 4) 高尾真紀子, 日本版CCRCの課題と可能性—ゆいま〜るシリーズを事例として—, 地域イノベーション, 法政大学地域研究センター(2018)
- 5) 社会福祉法人佛子園ヒストリー, 社会福祉法人佛子園HP, <http://www.bussien.com/info/history.html> (参照 2019-05-30)
- 6) 白山市の統計, 石川県白山市HP, <http://www.city.hakusan.ishikawa.jp/kikakusinkoubu/jouhoutoukei/toukei/DATABOOK/toukei.html#toukeisy> (参照 2019-05-30)
- 7) 雄谷良成監修, 竹本鉄雄編著, ソーシャルイノベーション 社会福祉法人佛子園が「ごちゃまぜ」で挑む地方創生!, ダイアモンド社(2018)
- 8) ガイヤの夜明け, 「我らが創る! 新たな”しごと”」シリーズ人生が変わる働き方! (2), 東京テレビ(放送 2019-07-02)
- 9) 2018年医療福祉建築賞, 一般社団法人日本医療福祉建築協会HP, [https://www.jiha.jp/awards/awardedworklist/2018-bs\\_gyozenji/](https://www.jiha.jp/awards/awardedworklist/2018-bs_gyozenji/) (参照 2019-06-26)
- 10) 2017グッドデザイン賞特別賞[地域づくり], GOOD DESIGN AWARD HP, <https://www.g-mark.org/award/describe/46041?token=P77z5raah> (参照 2019-06-26)
- 11) 平成30年度日事連建築賞優秀賞, <http://www.njr.or.jp/prize/past/> (参照 2019-08-26)